『ゾヤの物語』　　2025 年 10 月 20 日

「東京新聞」に、2002 年に出版された『ゾヤの物語　自由を求めるアフガニスタン女性の闘い』が、国際的なベストセラーになっているという記事を見て、興味を引かれた。ゾヤ（仮名）という女性が、RAWA（アフガニスタン女性革命協会）の運動に共鳴し、女性解放を求めて闘った半生を描いた物語である。

ゾヤが物心ついた頃は、アフガニスタンはソ連の侵攻下にあった。国民は懸命に抵抗し、9 年に渡る戦いの後、ソ連軍を撤退させた。その後、イスラム原理主義の軍閥ムジャヒディーンが権力を掌握し、恐怖政治を敷いた。ゾヤの母は大学出のインテリで、隠れた RAWA の活動家で、父はリベラルな思想を持ち、ムジャヒディーンの統治に反対していた。両親は、権力に反抗したとして殺され、遺体を確認することもできなかった。ゾヤは、友人がムジャヒディーンに連れて行かれそうになった時、高い建物から飛び降り、自死したことを知る。友人は拷問を受けるよりは死を選んだのである。

14 歳の時、ゾヤは祖母（血の繋がりはない）と共に、生まれ育ったカブールからパキスタンに亡命し、クエッタで、RAWA が指導する学校教育を初めて受ける。アッラーに従うことが第一で、第二は王に従うことだと教えられていたが、そこで、王は人間であり、間違ったことをすれば王に反抗するのが義務である、女性は男子の性の奴隷ではない、女性も性の喜びに浴する権利がある、民主主義や人権、フェミニズムの意味などを教えられる。

アフガニスタンでは、ムジャヒディーンから新しい軍閥タリバンに勢力が移行していった。タリバンも女性を蔑視し、同じような恐怖政治を敷いていた。ゾヤたちは、同胞の惨状を聞き、学校を出て、隠れ家に住み、祖国の人々の苦難に心を寄せ、RAWA 運動に加わろうとする。祖母も「娘や、お前の人生は特別なものなんだよ。母さんや父さんに対して恥ずかしくないお前の姿が見たいものだね」と励ます。どの国の拷問も厳しいが、アフガニスタンのイスラム式拷問は残酷で、処刑は見せしめに執行されている。ゾヤは女性だけでは危険なので、一人の男性を伴い、カブールに帰郷する。重く厚く、歩きにくいブルカを着なければならない。緊張の国境の検問を通過し、カブールに帰り着くが、街は荒廃し、恐怖政治が罷り通っていた。しかし、RAWA の活動家たちは、隠れ家で女児を教育し、タリバンが乗り込んで来た時の言い訳に備え、クルアーン（コーラン）を見える所においていた。また、RAWA の横断幕を広げ、デモをする。そして「原理主義者をやっつけろ！ 女性の権利は人間の権利だ！ 民主主義万歳！」と叫ぶ。もちろん、手痛い反撃を受ける。

ゾヤは 3 年後に、パキスタンのペシャワールに移り、難民キャンプに住む。小さな子どもたちは僅かの金を得ようと懸命に働く。病気になった人は死人のように反応がない。医者が来て薬を渡すと、その薬が全てに効くと思い込んでいる。三食後に飲むように言うと、食事は一日一回あるかないかだと答える。何千もの墓があるが、名を記す墓標さえ買えない貧しさである。ゾヤは、そこで識字教育をする。彼女は、「同胞に尽くすことなく、自分が生きた証しを何も残さずに死んでしまうのは恐ろしいことだ」と言う。

米国の劇作家から、RAWA が招待され、ゾヤはニューヨークに行く。林立するビルと豊かさに圧倒される。そして、RAWA の活動報告をする。その後、9・11 の同時多発テロが起き、アフガニスタンは米国からの猛攻撃を受ける。ゾヤは RAWA の活動を続け、「もしも自分の国に平和が戻ったら、私は帰国してカブールの破壊された街を歩いてみたい。ブルカではなく、太陽の光を顔に受けて歩いてみたい」という言葉で物語を終えている。アフガニスタンに、命を賭して女性の尊厳を守ろうとする人々がいることを知った。ゾヤが今も命を保ち、生きた明かしを続けていることを祈る。